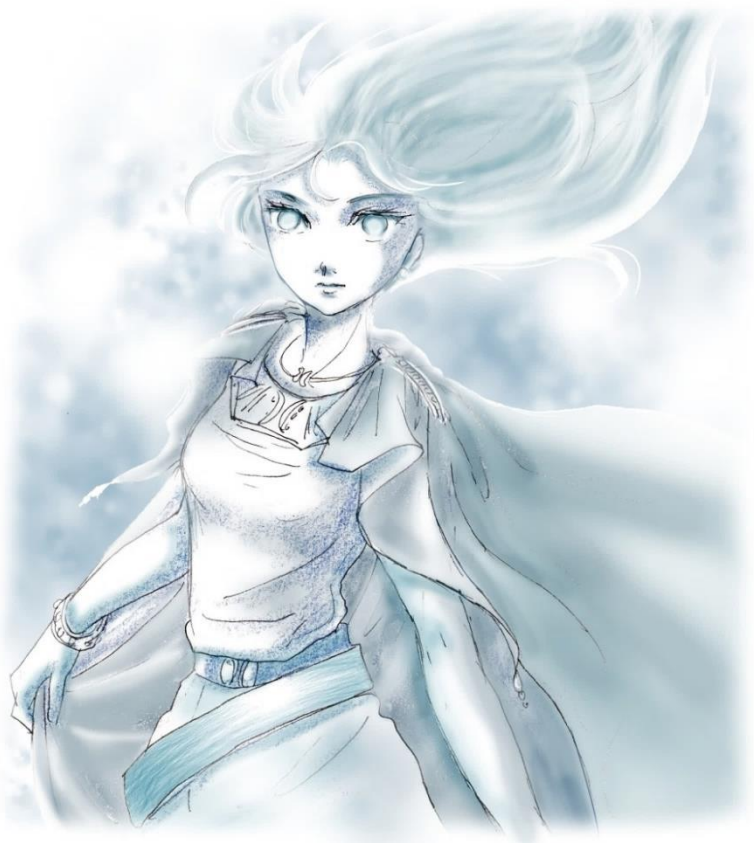


風の末裔シリーズ・3rdシーズンの8

～ スピカ ～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

「おはよう！ モエギさん！」

明るく挨拶するユコとは真逆に、モエギは眉間に縦線を浮かべ、足の踏み場もない部屋の入り口に立ちすくんでいた。

「ユコ…、西風の里が、常駐している蒼の一族の方に一番にお願いしている事は、分かってくれていると思うが…」

「ええ、不在の西風の長様の代わりに、この土地の風を鍛みなく流す事だわー！」

イラついているモエギの様子を、分かっているのか気付かないのか、ユコはスラスラと答えた。

「あの状態のカワセミに、他の事は頼めない。でも、それだけは最低お願いしたいのだが」

昨日到着してから、シエット気流に酔ったカワセミ長は、ぶっ倒れて寝たきりだ。ナナとの引き継ぎはユコが引き受けたが、今までの常駐者とあまりに違った長殿に、里の者の間でも戸惑いが囁かれていた。

モエギだって不安だ。カワセミはこの任務に気乗りしていない感じだし、ユコはモエギには多分ちょっと苦手なタイプだ。

それでも、こんな時だけモエギを里の代表扱いする長老達に促され、渋々と声を掛けに来たのだ。

しかし戸口をくぐった途端、部屋の有り様を見て、開けた口

が塞がらなくなった。

昔の宿屋の、二間続きの客間の奥にカワセミ、手前にユコが落ち着いているのだが、ユコの部屋は一日目にして何故？ という位、色んな物がとっ散らかっている。

仕事に関係あるのかも分からないような、鳥の羽を繋げたのや、大小の石、干からびた植物…。

モエギは足の裏にくっ付いた何かを剥がして見て、死にそうなる顔になった。

「あら、風はもう流れているでしょう？ 空を見てみて」

ユコはモエギの剥がしたゲンゴロウのミイラをまたその場に置き直しながら、のほほんと言った。

「えっ…？」

モエギは半信半疑で窓から身を乗り出した。明け方の鍛んだ雲は既になく、スッキリと筋雲の美しい朝の空になっていた。

「いつの間にか？ カワセミはもう元気なのか？ 出掛ける様子を見なかったが…」

「ううん、まだベッドよ」

「では、ユコが？」

「アタシはまだそんな難しい事出来ないわよお」

ユコは山脈になった着替えの山を越えて、カワセミの寝ている部屋の御簾を細く開けた。

ベッドの中からカワセミの細い左手だけが突き出して、人差し指と中指を立てて空中をつつつかき回している。

「さすがカワセミ様、寝ながらでもお仕事はキッチリするのね」

「…寝ながら…」

モエギは、もう一度窓から空を見た。さっきの筋雲が形を変えて薄く流れている。

「……………」

以前の西風の長…モエギの母の浅葱の君は、風を流す術を使う時は、口を濯(すす)ぎ、馬で高く跳んで空の上で呪文を唱えていた。蒼の長も、ツバクロもナナも、上空に向いて直接風を流していた。

寝床から片手で風を流す奴なんて、見た事ない…。

「手抜き…とか思ってる？」

モエギの複雑な心情を見透かすように、ユコが覗き込んだ。

「ああ、ちよっと、思った…」

「ふむ、正直、アリガト。カワセミ様はね、結果さえキチンとしていけば、見かけはどうでもいい主義なの」

「そう…なの…か…?」

まだ歯切れの悪いモエギに、ユコはニッコリ微笑みかけた。

「他の仕事はアタシがやる。頑張るから教えてね！」

「あ、ああ…」

今まで蒼の里の者は自分が主導権を持って、自主的に、ある意味勝手に仕事を進めていた。主導権を渡されたのは初めてだ。

「差し当たって、ナナは朝一番は何をしていたの？」

「ああ、見回りだな、…朝と夜」

「見回りね！ アヤシイモノがないか見て来るのね。うん、分かった！」

ユコは上着と頭絡を肩に掛けて、モエギと外へ出た。

「頭絡は既に置いておく場所があるぞ」

「あ、うん、頭絡は手元に置いておく習慣なの。特に里じゃない所にいる時は。縁起担ぎみたいなものよ、あはは」

「……………」

馬装してくれたシドとソラに丁寧に敬礼を言い、ユコは空へ舞い上がった。飛び方は父親のツバクロ似だった。

「何か調子狂うヒトですね」

ソラが素直な感想を口にした。

「すごい美人なのに全然気取らないで、大口開けて笑うのな」シドは男の子としての素直な感想を言った。

二人ともお揃いの白テンの毛皮の帽子を被っている。ユコがお土産にくれた物だ。

「アタシとナナが子供の頃被っていた物なの、お古で」メメンね。

でもピツタリ、よかった」

そう言って乾風に真っ赤な耳の二人に被せてくれたのだ。

二人ともどっちがナナので、どっちがユコのだったか、微妙に気になった。それで、一日毎に交換して被る事にした。

「到着した時はびっくりしたけれど…、気さくで良いヒトですよね」

どちらかと言うと余所者に対して警戒心の強いシドとソウだが、ユコには気を許すのが早かった。子供の方が余計な事を考えず素直にそのまま受け入れられる。そういうの、モエギにはちょっと羨ましかった。

「お前ら、大事な事を忘れてるぞ。ユコはおまけで、常駐者は寝だぎりのカワセミ長だ」

「ああ、そうでした」

モエギはざわざわした不安を感じていた。今までただ委ぬだねていればよかった。今度の長殿は明らかに違う……。

見回りから帰るとユコは、高台の建築現場にやって来た。修練所を建ててくれている砂の民の若者の為に、西風の娘達が炊き出しをうけている。

「アタシも手伝うわ、何でも言いつけてね」

「…ええ、でも、手は足りているのよ…」

娘達は顔を見合わせて「ユコ、ユコ」言った。

ねじり鉢巻にたすき掛けのモエギがやって来た。

「昼飯まだか！」

モエギはネチネチお喋りしながら雑炊に入れる団子を作るよりも、男衆を手伝って、煉瓦に練り土を運ぶ方が性に合った。

「あら、ならアタシもそっちを手伝おうっと」

ユコは掌を打って、髪をたくし上げた。

「あっ…ああ…」

娘達は口をパクパクさせて情けない顔をした。

「お前ら、言いたい事ははっきり言え!!」

モエギは娘達を睨んだ。

「?」 どうしたの?」

ユコが初めて不安顔になる。

「ユコ…」

モエギは溜め息吐いて、ゆっくり言った。

「お前、自覚ない…ってのも不思議だぞ? そんな絵から抜けたような容姿でウロウロされたら、男共の目がお前に釘付けになって、この娘達にしてみたらガツカリな状況になるんだよー」

あんまり直接的過ぎて、娘達は青くなって赤くなった。

「……………」

ユコは下を向いてしまった。

モエギはユコに近寄って、小さな声で、

「お前は何も悪くない。しかしナナが苦心してお膳立てしてくれた貴重な状況なんだ。ここは平和的な道を選んでくれないか？」

と、自分が言うとは思えない、ご都合なセリフを吐いた。リダーって難しい…。

しかし、下を向いたユコは、いきなりモエギの腰に付けていた印付け用の炭入れに指を突っ込んだ。

「ユコ?!」

「これでいいかしら?」

娘達の方を振り向いた巻き髪の妖精の白い顔には、見事な泥棒ヒゲが描かれていた。

「ユ…ユコさん…」

娘達は呆気に取られたが、堪えきれなくなって吹き出した。

「ホ、ホントにそのまま行くのか?」

スタスタと建築現場に向かうユコに、モエギは慌てて追い掛ける。

「意地になるにも程があるぞ。これじゃあ、娘達みんなでお前を苛めているみたいじゃないか!」



「大丈夫、大丈夫！」

泥棒ヒゲのついでにつながら眉毛も追加したユコがニンマリ振り向いて、モエギはまだ吹き出しかけた。

「モエギさんも、みんなに言ったと同じ、何も言わずにアタシの後ろで笑っていてね」

「…ああ…」

「ごきげんようー皆さんー」

昨日の別嬪(へっぴん)さんが来た!! と、砂の民の若者達は顔を輝かせて振り向いた。そして、しゃっくりしたみたいな顔をして止まった。

ユコは何も知らない風に、平然と仕事の段取りを聞いて手伝い始めた。後ろでモエギが困った笑いを浮かべているので、男衆も目配せて皆ニヤニヤと、何も言わなかった。

そうしてやはり何も言わない娘達と風食を囲んで、その日の仕事をやり終えた。

帰りがけ、ハトゥンがやっと、皆を代表するようにそっと声を掛けた。

「…このころで、マドモアゼル…、そのお化粧は、蒼の里で流行っているのかい?」

「えっ?!」

娘の一人が差し出した鏡を覗いて、ユコはワザとらしく飛び上がった。

「アタシ、一日この顔をしていたの? ヒドイ! 誰も教えてくれないんだモン! カワセミ様のバカア〜!!」

「……………」

トンだ狸娘だ。すべての罪を不在の夫に被せてしまった。

「アタシの旦那は、よっぽどアタシが大事なんだなあ!!」

ハトゥンが言って、男達は大笑し、娘達もつられて笑った。

嘘はよくないが、結果、皆が「ニニニ」とこの日を過ごす事が出来た。

モエギは感嘆の目でユコを見た。どうやら自分は先入観だけの思い違いをしていたようだ。

娘達に拒否されてモエギに説得され、そこで退くのは簡単だ。だけれどその先、皆との関係は絶対進展しない。娘達の心にだつてしこりを残してしまう。ユコはモエギが思っていた以上に

おおらかに大きかった。

馬繫ぎ場へ向かう道々、男達はユコを囲んで色々聞いたが、話題が『心配性の旦那』に集中していたので、娘達も不満に思わず、逆に興味津々で聞いていた。

「…」で、七つの時にカワセミ様に出逢って、それから師と仰い

ですとくっついてたの」

「弟子を食っちゃったのか、とんでもねえ師匠だな!!」

ハトウンの下品な突っ込みはモエギのひと睨みで黙らされた。

「ううん、アタシが押し掛け弟子だったの。小さい時からカワセミ様と一緒にいたくてしくて、無理矢理追い掛けていたの」

「わあ…!!」

年頃の娘達には、その辺が食い付き所だった。

「それで、想いが叶ったのね。ステキ!」

「ね、プロポーズの言葉は?」

「そうだ、殴り合いをしなきゃ、何て言って申し込みゃいいんだ?」

この辺は男性陣にも興味のツボが重なった。自分達の大將は全く参考にならない。

「ん……」

ユコは指を顎に当てて問を置いた。

「…内緒……」

「ええ〜〜」

身を乗り出していた全員がつのめった。

こんな風に、ユコはするりと皆の中に溶け込んだ。

三日目の朝もカワセミはベッドの中だった。

上空に風が激むと、手を上げてボンボンと呪文を唱えて風を

流す。大したものだが、老人達には、今度の長様はえらく急げ

者だと、陰口を叩かれていた。ユコが一生懸命代わりをこなし

ているが、視界の狭い頑固者には、そういうのって見え辛い。

「ユコ、カワセミっていつもあなのか?」

さすがのモエギも少し気をもんで、部屋で何やら書き物をしてるユコに話し掛けた。

「んん…? ダメかしら?」

「私は構わないんだが、以前の駐在者と余りに様子が違つから」

「ごめんなさい……」

「いや、ユコが謝らなくていい」

モエギにしたら、働き者で優しいユコが、肩身の狭い思いをしなければならぬのが、理不尽で腹立たしかった。

「アタシじゃ至らないかしら……」

「そんな事はない。老人達は蒼の長の威厳を求めているだけだ。

第一、至らないと言える訳がない。風を流す事は西風の長の

役割なんだ。長の娘なのにそれが出来ない私が…いけないんだ

…」

喋りながらモエギは元気がなくなった。今までの駐留者が完

壁過ぎたので忘れがちだったけれど……

「本当に……至らないのは私なんだ……」

モエギだって覚えている訳ではない。蒼の長に手解きを受けて、内なる能力を開く修行を一生懸命やっている。それでも、本当に歯痒いぐらい手応えがないのだ。

やはり混血の自分には、長の能力は高望みなのだろうか？

「モエギさん…」

ユコは項垂れてしまった西風の娘を覗き込んだ。

「母様に出来るのにアタシには出来ないコトなんて、山ほどあるわ。よくあるコト、みんなそうなのよ」

ユコは明るく、モエギの肩をポンポン叩いた。

今まで、『その内出来る様になりますよ』的な慰め方は多くされたが、ユコの言葉には実感が伴っていた。ユコといると、暖かくなって、心の殻が溶ける感じがした。

既ではシドとソラが何頭かの馬を引き出して準備をしている。午後からユコが、年長の子供達に乗馬指導をする予定になっていた。

「モエギ様…」

鞍を運んでいたシドが、モエギを見止めて駆け寄って来た。

「ユコさん、今朝、出掛ける前に長老の側近の一人に呼び止められて、文句言われてたんです」

ソラも横に来て言った。

「そなたみたいな娘ッコの見回りなぞ死てにならない、何かあったらどうしてくれる…、みたいな、結構キツメの事」

「そんな事を…」

蒼の里からの援助は、見返り無し、眷族の繋がり的好意だ。それを忘れている事に危うさを感じる…。

「どうしたの？」

ユコが頭絡を肩に掛けて現れた。

「シド、ソラ、準備ありがとう。今日は貴方達も生徒よ。えと、

シドは空中で正確に巻き乗りするのが苦手だったわね」

「へっ？」

「ソラは右からの乗馬が苦手。鎧に足を掛けてもなかなか馬の背に上がれないのよね」

「え…えと、はい…」

二人とも恥ずかしそうにモシモシした。

「叔父様達の指導日誌に目を通しておいたの。アタシがいる間に苦手の克服をしましょう。ソラ、いつでも馬が左を向けているとは限らないのよ。今日は左右の飛び乗り飛び降り練習ね」

「げげ！」

モエギは驚きながら聞いた。

「蒼の長はそんな物を作っていたのか？」

「子供達全員分ね。皆、上達が凄く早い。教えがいがあるわ」
 多分、駐在者が入れ替わるので、効率良く指導出来るように
 の日誌だ。乗馬指導ひとつ取っても、片手間でない、蒼の里の
 真撃さが伺える。

ユコはニコニコして子供達を待ったが、風過ぎの鐘が鳴って
 も何故か誰も来なかった。

「…？ 曜日を間違えたかしら？」

「いや、今日でいい筈だ…」

「見て来ます」

シドとソラはそれぞれ別方向の子供達の家に走った。直に二
 人とも戻って来た。

「……………」

「どうした？」

「長老達が…」

二人はチフリとユコを見た。

「いいから言ってみろ」

モエギに促され、シドが先に喋った。

「蒼の里の長殿でなければ乗馬を習っちゃダメだって」

「はあ?！」

「こっちもそうです。危なくて大切な子供達は預けられないっ

て」

「バカな!!」

モエギが厩を飛び出しかけた。

「待って、モエギさん」

ユコの声に止められた。

「叔父様に言われているの。西風の里で決定した事には従うよ
 うにと」

「…ユコ…」

確かにモエギは次期長だが、様々な決定は老人達がする。モ
 エギが意見をねじ込む事は出来るが、化石頭の老人相手にいつ
 も苦勞している。

「ユコさん…、僕達だけにでも、授業して下さい」

進み出る二人に、ユコは精一杯元気に微笑んだ。

「ありがとう…。でも、叔父様達が作った理(ことわり)を守り
 たいの。ごめんなさいね…」

ユコはそう言っ素早く厩を出て行った。そしてその日は建
 築現場の方にも姿を現さなかった。

「ナナだって、蒼の里の長ではないではないか」

老人達の集会所にねじ込んだモエギは、机を叩いた。いつも
 彼等に話す時は、感情を出さないよう気を付けているが、今は

抑えられなかった。ユコに…あのユコに、何て思いをさせるんだ…！

「ナナ殿は次期長です。ほぼ確実な」

老人達の嫌味が伝わった。

モエギは血統通りの能力が開かなければ、長にはなれない。

老人達は密かにそれを望んでいる。頼りない跳ね返り娘よりも、蒼の里から優秀な能力の入り婿を迎えたいのだ。

「ユコは、ナナの双子の妹だ」

「ユコ兄妹でも能力は雲泥の差と聞き及びます。風を流す能力すら無いのでしよう。」

老人達は言われる文句を予測し、反論を用意していたようだ。今回ばかりは自分達の意見を通さないと活券に関わる…、といった所だろう。砂の民との交流をモエギに押し切られたのを、根に持っているのだ。ナナが決めた事だから口出ししないが、砂の民が里に入りのするのを、未いまだ、苦々しい目でねめつけている。

「…しかし…」

「モエギ殿、里の子供達は宝です。空を飛び危険な乗馬訓練を素人娘に任せられましようか」

「……………」

ダメだ……殆ど接した事もないユコを素人娘なんて決め付け

ている時点で、何を言っても平行線だ。どうして自分の目で見て触れて知ろうとしないのだろう。ユコの事も、砂の民の事も。

モエギは情けなくなった。自分は大切な客人達さえも守れないのか…。

ユコは夜の見回りの時間にはきちんと既に来た。

何だか疲れた風で、目の下に隈を作ってボウツとしていた。

シドとソラに馬装の礼を言うのも忘れて、フラリと暗い空に溶けた。いつもの元気なロケットスタートはなかった。

二人の既番の少年は、顔を見合わせて首を横に振った。

ユコが出掛けたのを見計らって、モエギは宿屋の入り口をくぐった。

カンテラの灯りで、足の踏み場もないユコの部屋を通り過ぎ、続きの間の御簾を開けた。窓のない部屋の奥のベッドに、ヒト一人分の膨らみがある。

「そもそもカワセミが起きていれば問題ないんだ。奥方のユコが辛い目を見ているというのに、いつまで呑気に眠かけ漕いでいるんだ！」

モエギはスカスカとベッドに近寄り、カワセミの肩を掴んだ。

「……………」

掴んだ手を思わず引っ込めた。鎖骨の浮き出た肩は、氷のよ

うに冷たかった。カンテラを近付けてよく見ると、目の回りがうっすら紫で、呼吸はしているが驚くほど浅かった。

「…おい？ 大丈夫なのか？」

モエギは再度カワセミの肩を掴んで揺さぶった。しかし水色の妖精はグラグラ揺れるばかりで、起きる気配もなかった。

「ユユはなんで何も言わないんだ？ 医者に見せた方がいいんじゃないのか?!」

モエギは後ずさって宿屋を出た。

「モエギ様!!」

息せききったシドとソラが厩から掛けて来た。

「ユユさんの馬だけ戻って来たんです!!」

「何だって?!」

「怪我しているんです。かすり傷だけど、鞆ともに三本の爪の跡!!」

「ユユ!!」

慌てて厩に走ろうとしたモエギの正面で、シドとソラが凍り付いて止まっていた。

「…ユユ…ユユ…」

二人の視線を辿って振り向いたモエギも固まった。

さっきテコでも起きなかった水色の妖精が、宿屋の戸口にフ

リと立っているのだ。

「ユユ…ユユ…ユユ…」

ボサボサ頭に寝起きのクシヤクシヤのローブ、そして裸足だ。右手首に巻いた半透明の細長い石が、光って震えている。

自分の橙色の石と同じ性質の物だ！ モエギは直感で思った。では、ユユが何処かで危機に陥って、カワセミを呼んでいるのか？

「ユユは見回りに行って…」

モエギがかすれた声で答えかけた時、厩の方でバキバキと大きな音がした。

「あああーっ」

「な、なんてコトをー」

厩番の少年達が頭を抱えて叫んだ。二頭の馬が凄い有り様で駆けて来たのだ。蹴破った馬栓棒を肩に引っ掛けたカワセミの馬、繋がれていた杭を引っこ抜いて引き摺ったユユの馬。

「いい仔だ……」

カワセミは馬栓棒と杭をガラガラ投げ捨て、スルリと裸馬に飛び乗って、空へ舞い上がった。

「ユユの所へ…!」

茫然と見送るシドとソラの肩をモエギが踏んで行った。

「ごめん!!」



カワセミの馬を追って舞い上がるユコの馬のタテガミに、ギリギリで飛び付いた。

「モエギ様！ 無茶です!!」

馬装が解かれて手当されていたユコの馬には鞍も手綱もない。飛行に馴れていないモエギが裸馬で飛びなんて危険過ぎる。

そんな事は重々承知だ。しかし、ユコがどうにかなっていると分かっている、何もせず待つなんて出来ない。

砂漠の真ん中で、ユコは右手に細剣、左手に短剣を持って構えていた。周囲には何も見えない。

しかし何者かが砂を蹴り、ユコを中心にして円を描いている。殺気が走って、砂が大きく舞った。

「ええい!!」

打ちおろした細剣の方が、何かに引っ掛かった。ユコの後方で、肩口に傷を貰った飛び蜥蜴ごかげが姿を現した…が、またすぐに消えた。こんな風にユコは、ずっと姿の見えない敵に翻弄されているのだ。

叔父様の報告書にあった、飛び蜥蜴だ。西風の里の水場のあんな豊かな土地を狙っている。蒼の一族の駐留者がいる間は手出しして来なかったが、見回りをしているのが女と見るや、様子見に襲って来たんだろう。

最初の一撃を受けて傷付いた馬は逃がした。あの馬の脚なら蜥蜴は追い付けなかった筈だ。きっと里に戻って急を知らせてくれる。

ユコは胸の上のピンクの石を握った。カワセミ様が来るまで持ちこたえなきゃ。西風の里には、やっぱり強くて恐い蒼の里の駐留者がいる…って知らしめなきゃならない。

しかし周囲を囲む複数の見えない敵は、息を合わせて一度にユコに飛び掛かった。

「破邪——!!」

交わらせた両方の剣から、翡翠の光が飛び散る。前の蜥蜴は吹っ飛ばしたが、一番後ろの奴がユコの右肩をかすめた。

「ぎゃっ！」

倒れた妖精に蜥蜴の爪が襲い掛かる。

——ガシッ——

緑の槍が、寸での所で爪を弾いた。

ユコの前に、ボサボサ頭の水色の妖精が立ち塞がる。

「カワセミ様！」

カワセミの半開きだった目が、ユコの肩口の怪我を見て一気に覚醒した。眉間にみるみる縦線が入って行く。

「伏せていろ……！」

怒りに髪を逆立てて、カワセミは槍を頭上に振りかざした。槍は緑から眩しい白に変わる。

その時上空にモエギが追い付いた。カワセミのただならぬ迫力に、息を呑んで空中に止まる。

「ユコを傷付けたのは…!! どれつだあああ——!!」

「ああっ駄目! カワセミ様!!」

カワセミが光の槍を地面に突き立てると、ユコが叫ぶのと同時だった。

——ズザザザザ——!!!!

槍が刺さった所から、地面に蜘蛛の巣状に衝撃波が走り、周囲の敵を一網打尽に吹っ飛ばした。

カワセミの必殺技! 蜥蜴どもに長の恐さを知らしめるには十分だ。草原の地で炸裂する時はそれで終わった。しかしここは砂の上だ。

——ズザザザ——ンン!!!!

衝撃波は軽い砂を、上空数十メートルまで噴き上げた。

「けほっけほっ……」

「けほ……」

もうもうとした砂埃の中でカワセミが四つ這いで砂を吐き、その背中をさすユコも咳き込んでいる。

「カワセミ様く、ここは砂の国ですよお……」

「忘れてた…けほ…目が覚めた…けほ…トコだったんだモン…」

けほほ……」

ようよう立ち上がった二人は、しかし砂煙の中にトンでもない物を見た。

三匹の飛び蜥蜴と、その手の中のぐったりとしたモエギ。

「モエギさんっ!!」

上空で砂を浴びたモエギの騎馬は視界をなくし、衝撃波を逃れて飛んで来た蜥蜴に体当たりされたのだ。鞍も手綱も無いモエギは簡単に落っこちた。そして地面にしたたかに身体を打ち付け、蜥蜴に手足を押さえられたのだった。

落ちたショックで失神したのか、モエギは動かない。蜥蜴達はニヤリと嫌な笑いを浮かべて、モエギの手足を掴んだまま羽根を広げて飛び上がった。

「モエギさん——!!」

剣に手を掛けて走り出しかけて、ユコは止まった。蜥蜴達が空中でモエギの首に爪を当てたからだ。そしてギロリとカワセミを見た。

水色の妖精は眉間に縦線を浮かべたまま、冷静な眼差しで蜥蜴の金色の目を見据えた。

「…西風の里の土地を寄越せと言いつのか…?」

「カワセミ様—」

ユコが驚いて叫んだが、カワセミは続けて蜥蜴に語りかける。

「あの水のある土地だけ手に入れれば、その娘は無事で返すんだな?」

蜥蜴達は、瞳の中の縦線の瞳孔を更に細めて頷うなずく。

「分かった…」

「カワセミ様!!」

「決めるのは西風の里の連中だ。聞いて来るから待っている」

「カワセミ様あ…」

「ユコ、行くぞ」

オロオロするユコに構わず、カワセミはとっとと瘦せた草の馬に跨がった。

「…ユコ!!」

ユコはモエギを振り振り返り、自分の馬を引き寄せた。

カワセミは先に地上を蹴って浮き上がり、今一度蜥蜴を見据えた。

「その娘は『無事』で返すとの約束だぞ。怪我の手当てはしておくんだ」

蜥蜴達は意外と真面目な顔で頷いた。自分達を同等な相手として交渉に乗ってくれるとは拍子抜けだった…という顔だ。

「カワセミ様…」

上空でカワセミの馬に追い付いて、ユコは別方向を差した。

「ハトゥンに知らせて来ます。砂の民に助けを求めましょつ」

「駄目だ!!」

「どつして?!」

「砂の民はまだ正式に同盟を結んでいない」

「ハトゥンは個人として助けに来るわ!」

「ユコ、これは西風の里の問題だ。下手に他部族を関わらせると、争いの輪を広げる事になる。分かるだろ」

「…定石は分かっている、…でも……」

親指の爪を噛んで焦れるユコに、カワセミは冷静に言った。

「総ては西風の里の者達次第なんだ。砂の民に救援を求めるにしても、西風の者がやらなければ駄目なんだ。ボク達は彼等が何を決めても従わなければならない」

「……………」

ユコは黙った。西風の里に関わるという事…の意味を、今更に噛み締めた。

「な、なんですとお?!」

夜半叩き起こされた老人達は、集会所で雁首揃えて真っ青に

なった。

モエギが蜥蜴どもに捕らえられて人質になった。彼女の身柄と引き換えに、西風の里の土地を奪越せと言っている。

カワセミは事実だけをサラリと告げた。

老人達を呼びに駆けずり回ったシドとソラも、そこで初めて現状を知り、蒼白になった。

「カワセミ殿…!! な、何の為にそなたがいる?! このような事を防ぐ為…」

「防ごうと闘ったけれど、大切な次期長殿が蜥蜴どもに捕まっ
て爪を当てられた。退くしかなかろう」

ユコは隣でオロオロした。何て冷たい言い方…。そもそもモエギさんが落馬したのも半分はカワセミ様のせいなのに。

「モ…モエギ様…は…?」

シドとソラは狼狽して、口もよく回らない。

「落馬して気を失っていたけれど、呼吸は整っていたし、大きな怪我はしていなさそうだった。蜥蜴も、無事返すという約束は守る感じだったわ」

ユコは小さい声で二人にだけ言った。大丈夫、必ず助けるから…と、言いたいのに、言えないのが辛い。

「助けるのはそなた達自身だ」

ユコの心中を見透かすようにカワセミはまた居丈高に言った。

「今すぐ身の回りの物をまとめて里を出る準備をするんだな」

いきなりな言いように、老人達にシドとソラ、ユコまでが飛び上がった。

「な、何を言われるか?! そういう侵略から里を守ってくれる為、そなたは来ているのである」

「ああ、里を守る為、妻は砂漠の真ん中で一人、蜥蜴と戦って傷付いた。そなた達が安全に、不満の夕ネを探している間」

老人達は喉を鳴らすだけで何も言えなくなった。言っちゃえば、そうなのだ。

「カワセミ様、それはいいです…。感謝して欲しくてやっているのではないもの…」

ユコはいたたまれなくなっって口を挟んだ。

「ほ、僕達、いつだって感謝しています!」

シドとソラは叫んだ。

「里を守って貰って…、勉強も教えて貰って…、他にも、一杯…」

「では、今、何をすべきだ…?」

カワセミは静かに二人に問うた。

「……………」

分からない…感謝の礼を欲されているとは思えない。

西風の里の土地を明け渡す？ 代々暮らして来た土地を自分の代で手離して、何処ともしれない流浪の民になるのか？

急にリアルな現実が迫った。そう、蒼の里からの介入がなければ、浅葱おきぎ(が)が亡くなった時点で、とっくにそうになっていたのだ。

そして、蒼の里は、自分達に、運命に抗える力を培(つ)ちかう時間をくれた。それに応えるのが、答だ…!!

「と、土地を出るのは嫌です…でも…」

「モエギ様は大事です…」

シドとソラは震える声で言った。

「この地もモエギ様も、欠かせません。両方あって、僕達、西風の民なんです」

最後の方は声の震えも取れ、二人は腰の短剣に手を掛けて、背筋を伸ばした。

「それが、キミ達の答えだな…」

カワセミはやはり静かに言って、二人を見つめた。

いきなり戸口が開いた。西風の娘達が、思い思いの武器を持って立っていた。

「モツ…モエギ様は私達を大切って言ってくれましたっ。私達も、モエギ様が大切ですよっ」

「そのモエギ様の大事にしているこの里を守りたいですよ」

老人はカワセミを横目で盗み見ながら言った。

「理想だけで現実には抗えると思っな。そなた達が蜥蜴と闘える訳がなかるう」

誰かが何かを言えば、それを否定するのは簡単だ。

「砂の民のボーイフレンドに助けを求めたわ！」

娘の一人が叫んだ。

「今、一番馬駆けの上手な子が走ってる。もう着く頃よ。私達の頼み、聞いてくれるわ。だって私達、家族になるんだもの！」

老人は目を白黒させて、ただ口をパクパクした。

カワセミは娘達に向き直った。

「それが、キミ達の答え……」

ユコはだんだんカワセミが何をしたいのか分かって来た。

最後にカワセミは老人達に向いた。

「皆、闘うと言っている。しかしそなたの言ったように、現実には甘くはない。下手したら、西風の里は大切な若者達を失う。

そなた達の答えを出せ」

老人達は途方に暮れた。自分から言葉を始めるのは簡単ではない。

「……………」

水色の長殿は、改めて自分達に依頼して欲しいんだらうか？
頭を下げて頼んで欲しいんだらうか？

自分で見て触れて考える…という事からトンと遠去かっ
た石頭達は、いざ現実を突き付けられたら、実は自分の言葉は
何も持ち合わせてはいなかった。

老人の一人が意を決してカワセミに頭を下げようとした時…

「ナナ様なら……」

ソラが言葉を発した。

「僕達に血を流して欲しくないって言うと思う。だから……」

カワセミは目を見開いて、幼さの残る少年に真っ直ぐ向き直
った。

「僕、蜥蜴の所へ話に行きます。モエギ様を返して貰えるよう、
頼みます。里の土地は明け渡せないけれど、水を分けるとか…
何らかの方法で譲歩出来ないか……って」

「それは……」

カワセミはソラから老人達に視線を戻した。老人達に導き出
して欲しかった答えだろう。この少年は、とっくに長者を越え
ていた。

子供って、いつの間にかこんなに成長しているんだらう……。

「うん……」

カワセミは穏やかな顔になってソラを見た。

「では、ボクも共に行こう。キミが蜥蜴達と交渉するんだ。そ
れと、キミ」

シドは飛び上がってカワセミの正面に来た。

「護衛騎士ナイトとして、帯剣して同道してくれ」

「は、はい！」

二人は初めて、セットではなく、別々に扱われた。凄く新鮮
だった。

「ユユ」

「はい……」

妻は静かに控えた。

「彼に、ユユの細剣を貸してやってくれ。それと、娘達と砂の
民達の仕切りを頼む。物騒な方向へは持って行かないつもりだ
が……」

少し顔を近付けて小さい声で言った。

「こういう緊張感って、大事だ……」

「はこ」

「我等は……？」

動き始める皆から取り残され、老人達はオロついた。

カワセミに代わってユコが答えた。

「皆が無事帰ったら、勞ってあげてください」

遠巻きに、西風の娘達と砂の民が囲んでいる。

ハトゥンは橙色のピアスを握り締め、隣にはユコが背筋をシヤンと伸ばして立っていた。不安そうに背中を丸めると、皆に伝わる。

囲みの真ん中に布の天涯てんがいが張られ、馬皮が敷かれた上にモエギが寝かされていた。蜥蜴の数は増えていたが、荒んだ目ではない穏やかな感じの老蜥蜴が、モエギの側にいた。多分蜥蜴の中の医師だろう。

ソラとシド、それにカワセミが下馬して、一際大きな首領らしい蜥蜴と対峙している。

「奴等、下卑で野蠻だ。交渉なんて通用するのか？ 第一言葉が分かるのか？」

ハトゥンが苛立たしげに足踏みしながら言う。

「カワセミ様は彼等の意思を理解していた。あのヒト達も、約束は守るとかの理(ことわり)は通じるのよ。アタシ達がそれを知ろうとしなかつただけ……」

ユコは天涯の下を真っ直ぐ見据えて言った。ハトゥンも黙って同じ方向を見た。今は待つしかない。

話を始める前に、カワセミがモエギに歩み寄るのが見えた。

蜥蜴の医師と一言二言を交わし、次に大きな蜥蜴と何やら話し出した。

程なく、カワセミは振り向いて、ユコとハトゥンを手招きした。二人が乗馬して近付くと、蜥蜴達が馬皮にくるんだモエギを抱えてハトゥンに差し出した。

「モエギ……!!」

モエギは呼吸はしていたが、唇に色がなかった。

「意識が戻らないんだ。すぐ里へ戻す。里の中心の宿屋で治癒の術を施す」

カワセミはハトゥンに言いながら、自分の馬に跨がった。

ハトゥンは鞍の前にモエギを抱えながら、不安そうなシドとソラを見やった。交渉が終わった訳ではないみたいだ。

「カワセミ、ここを離れるのか？ ここでその治癒って奴を、すればいいじゃないか」

「あの場所でない駄目だ。西風の里の中心。西風の力、生命の力の集まる場所。だから西風の里なんだ」

カワセミは数歩馬を進めてハトゥンを促した。

「交渉するのは西風の外交官だ。ボク等のすべき事はこの娘の治癒」

「カワセミ様、アタシは？」

「ユコはモエギと人質交代。ソラ、シド、ユコを任せた。行く、ハトゥン」

口を半開きにする一同を置き去りにして、カワセミはさっさとその場を離れ、ハトゥンが戸惑いながらも後に続いた。

娘達や砂の民の男達が声をかけるが、カワセミは答えなかった。どこでどうすべきかは、やはり自分で判断すべきなんだろう。ハトゥンが砂の民達に、ここに居ろ、残ってちびっこナイ卜の心の支えになってやれ、と言い、娘達も共に残った。

「身代わりに人質なんて、随分なダンナ様ですね」

シドに囁かれたが、ユコは自分のすべき事を心得ていた。

「ソラ……」

ソラは通訳してくれていたカワセミがいなくなって、泣きそうな顔をしていた。

「大丈夫よ。ちゃんと伝わるから」

ユコが微笑むと、何でか安心感が湧く。ソラは息を吸って、自分の何倍も大きな首領の蜥蜴に向いた。

「あの場所はただの部落ではない。西風の一族の在るべき場所なのです。あそこで風を流し風を生む。それはこの世界を紡いでいる理(ことわり)の中の、大切な我らの役割。風が無くなっ

たらこの大地がどうなるかは、我々にも分かりません。ただ、無くすと二度と戻らないモノである事だけは確かです。我らは、それを子々孫々伝える義務がある。だからあの土地を離れる事は出来ません」

シドは朗々と語る相棒に目を見張った。そういえば自分がハトゥンに剣を習っている時間、ソラは大長やナナにくっついて何やら難しい説法を受けていた。ソラ、それが君の道なんだね……。

蜥蜴達には、世界の理(ことわり)だの義務だのは分からない。はっきり分かるのは、自分達に対して武力で来なかった事だ。多分あの水色の妖精は、自分達を一捻りにする力を持っている。それを行使せず、しかも交渉の前に身を引いた。

これは自分達を馬鹿にしているのではなく、自分達を理(り)の通る相手として扱っているからだ。ここで暴力で対応すると、こちらが自らを貶める事となる。蜥蜴達にもそれは分かった。だから、爪で一掻きすればバラバラになってしまいそうなの小さい子供の話も、聞いてみる気になっている。

ソラは話し終わり、次に首領蜥蜴が自分達の要望を伝えた。ユコが間で通訳しようとしたが、すぐ必要なくなった。ソラは教わらずとも、蜥蜴と意思を交わせるようになって行った。

西風の子供の隠れていた力…、言葉を使わずとも通じ合える能力…。ソラの一生懸命な、真摯な気持ちは、通訳するよりも確実に、蜥蜴達に伝わった。

全ての事に意味がある。浅葱(あさぎ)亡き後に現れた子供達の能力。こんな所に意味があった……。

西風の里の池の対岸から、蜥蜴達の好きに使える水路を引く事で話がついた。

西風の娘達は砂の民の若者達に礼を言い、若者達はいや良い夜だったさ…と、夜明けの砂漠に馬を返した。

シドは緊張で腰の抜けたソラを支えて戻り、ユコは水路が出来るまでの人質として蜥蜴の所に残った。人質といっても形だけ、ユコはのほほんと手を振って皆を見送った。

老人達は、妻を蜥蜴の中に残して来たカワセミに文句を言う程恥知らずではなかった。ただ、ユコに言われた通り、ソラやシド、娘達に、分かりにくい言葉で労いを述べた。

生まれて初めての大事な事を終えて肩を降ろしたシドとソラだったが、しかし里で新たな心配事が待ち受けていた。

「モエギ様が目を覚まさないのです」
宿の前に幾人かの子供が立ち尽くしていた。

「モエギ様っ?」

二人は急いで宿の建物に飛び込んだ。ユコの使っていた部屋の御簾を開くと、薄暗い中央にモエギが寝かされ、水色の妖精が目を開じてその額に両手を当てている。

二人が踏み入ってもカワセミはピクとも動かず、代わりに部屋の隅に座り込んでいたハトゥンがこちらを向いた。

「その辺のとっ散らかった物を踏むなよ。ちゃんと力が流れるように、配置されているらしい。それから、気持ちは分かるけれど、外してくれ。今のモエギには里の全てが障りになるんだ」

「……………」

「…………頼む…」

「…………はい…」

よく解らないが、ハトゥンが信頼出来るヒトなのは知っている。だから二人は大人しく外に出た。

外には心配顔の娘達も加わっていた。

「…モエギ様は大丈夫です」

ソラがやっと言って、皆各々の帰途についた。今は皆、安心した心で身体を休めるべきだ。

暗いのが明るいかも分からない、上下も色もない不安な空間で、モエギは膝を抱えていた。

自分の不注意でトンでもない事になってしまった。次期長が聞いて呆れる、皆に合わせる顔がない……。

膝を抱えてうすくまる娘にカワセミが斜めに近付き、無表情な声で言った。

「合わせたくなければ、合わせなければいい……」

モエギはじくんと動いた。

「……に籠(こも)ってこればいい」

「……そうかもな……」

モエギは更に丸くなった。

「私は里の者の為に何も出来ていない……」

「何で里の者の為に何か出来なきゃならないんだ？」

「そりゃ……！ 私は、次期長だ！ 皆の為に、能力も開かなきゃならない！」

「ふ………ん……」

カワセミは指を顎に当てた。

「自分の為に何か出来るのか？」

「……え……」

「何か出来るか？」

「……いや、私は……何も……」

「自分の為に何も出来ない者が、皆の為に何か出来ることは思え

ないな」

「………」

「先に自分の為に何かやってみろ」

「……何を……」

「そんな事まで聞くのか？」

「すまない……分からないんだ……教えてくれ……」

モエギは膝頭から目だけ出して、そおっとカワセミを見た。

カワセミは意外に、怒っている風でもなく、聞かれた事を真

剣に考え込んでいた。

「自分の欲求はないのか？」

「……欲求……」

「……そう」

モエギは自分の心をゆっくり手繰たぐってみた。

カワセミは苛つく風もなく、静かに待ってくれた。

「……母者のように……」

「……うん」

「母者のように……優しく大きく、包み込むような女性になりた

かった……」

「……うん」

「なれっこないから、ワザと逆に、ガサツに乱暴に振る舞った」

「……うん」

「ホントは……寂しい……」

モエギは小さい子供のような声で言っ、顔を膝に埋めた。

「じゃあ、寂しくなくなるようにしよう」

「でっしたらいいんだ？」

「そうだな……寂しくないって思えた時は、あるか？」

「……………ハトゥン……」

「うん……声に出して、ちゃんと、言ってみろ」

「…ハトゥンと…いる時…、寂しくない…」

「もっと、ちゃんと、大きな声で、言ってみろ」

「…ハトゥンといたい！ すっと、いつも、ハトゥンといたい！

長を継ぐ事なんて忘れて、すっとすっと…、今すぐ、ハトゥン

の所へ、行きたあいつ!!」

顔の前で水風船が割れたみたいなの衝撃が走った。今までいた
虚無な空間から一気に、物凄い流れの中に放り出された。

身体の左右を水面のように煌めきながら、何かがぶつかって
流れて行く。

風…？ 足元に明けの明星が見える。西風の里の上空を、風
が激しく流れている。初めてそれを、魂で感じているのだ。

それは一瞬の事で、また何かに引っ張られた。

見慣れた宿屋の壁と天井がグルンと回って、自分の肉体に落
っこちて来た。

ドサンと物音がした方へ目を向けると、ハトゥンがこれ以上
ない程目を真ん丸に見開いて、尻餅を付いていた。

現実のリアルなカワセミの声がした。

「・・・だ・そうだ」

モエギは弾かれたように起き上がった。

「……………今の…、喋ったのか？ 私が…現実に?!」

ハトゥンが尻餅付いた姿勢のままモエギから目を反らさず、
何回も頷いた。

宿屋の昔の受付の中で毛布にくるまって眠っていたシドとソ
ラは、カワセミに起こされた。

「空腹でフラフラ……何か食べさせて……………」

外は薄ら明るくなりかけていて、部屋にモエギとハトゥンの
姿はなかった。

「皆に合わず顔がないって」

昨日の残りの干し魚をベキベキかじりながら、カワセミがボ
ソツと言った。

「そんな…。僕達誰も責めないのに…」

「だから余計だよ」

項垂れてしまった二人に、干し魚の頭をくわえたカワセミが
またボソボソ言った。



「大丈夫…、『皆の為に何か出来る自分』になれたら、ちゃんと帰って来るから」

池の対岸の水路作りは、砂の民の男衆が、急ピッチでやってくれた。蜥蜴の所にいるユゴを早く帰してあげたくて、一日とかからずに掘りあげてくれたのだ。

「ホント、委屈しちゃったわ。あのヒト達、爪が長すぎて綾取のお手玉も出来ないんだモノ」

そんなコト言いながらも、ユゴは蜥蜴達に手を振って、里へ戻って男衆に礼を言った。

里から離れた森の中に、蜥蜴達は専用の水場を作った。

西風の里の境界は外せないし、蜥蜴達だって住処は明かせない。西風の里、砂の民、飛び蜥蜴の一族…、過去の確執は簡単には拭えない。

しかし、今の子供の子供、そのまた子供、ずっとずっと後になって、確執なんて皆が忘れた頃…、現在と違った関係を結べればいい。今はその下地を作って置こう。

西風の里の皆、モエギの失跡に戸惑った。

いなくなっただけで初めて、父親知れずの長の娘の気持ちを感じた。能力を継承せずに生まれたのは、彼女の責任ではないのだ…。

モエギが帰った時、負担を感じず暮らせるよう、自分達が強くなろう。娘達はそう思って、炊き出しだけでなく、大工仕事も進んで手伝うようになった。

「…え〜〜と……」

沢山の幼い瞳が水色の妖精に集中している。

老人達のたったの希望で実現した、カワセミ長による子供達への乗馬指導。

生徒にはワクワク顔のシドとソラも混じっている。あの裸馬で自在に飛び回る長様は、どんな指導をしてくれるのだろう？

「えと、……え〜と……」

当のカワセミは、だんだん脂汗がにじんで来た。こんな風に沢山の視線に集中されるのは、苦手中の苦手なのだ。

「馬で飛びつてのはね、バーツと行って、ピャーツと！」

「……は…?」

「それで、ピャ——ツとなって、ピュツと下りておしまい。以上！」

目が点になっている面々から逃れるように、カワセミは砂漠の砂ネズミよりも素早く姿を消した。

「あーあ……」

シドとソラの後方に控えていたユゴが、幾枚かの紙をヒラヒ

うさせながら溜め息を付いた。

「これ、無駄になっちゃった」

あの日の午後、ユゴは宿に籠って、カワセミでも指導出来るよう、要項を書き出していたのだ。

「まあ、カワセミ様に物を教わるなら、教わる方も覚悟が必要だわ」

「そうなんですか？」

「時々鞍も手綱もなしに急に飛び立つから、着いて行くのにも頭絡を身近に置いていなきゃならなかったり」

「……………」

啞然とする老人達の前を通り過ぎながら、ユゴは言った。

「カワセミ長の指導は以上です。唯一無二の弟子であるアタシが、続きを引き受けても宜しいかしら？」

子供達は肩透かしを食って茫然としているし、老人達は頷うなずかざるを得なかった。

里に到着した時のカワセミは、疲労困憊していた。

蒼の里で、結婚式の為、丸一日休みを作り出すのに無理をしたのに、その後流感が流行り、ノスリ、大長、ツバクロの順にぶっ倒れたのだ。こんな時に限って一人元気だったカワセミは、大車輪で働く羽目になった。

ユゴがカワセミを無理矢理西風の里へ引っ張ったのは、彼の身体の悲鳴を聞いていたからだ。ユゴはカワセミを休ませたくて一生懸命代わりを務めていたのだ。もっともシエット气流飛行が、弱った彼にトドメをさしたのだが。

砂の民の部落の外れ。

粗末な小屋の前で老夫婦が豆を脱穀し、庭の真ん中で一人の娘が薪を割って束ねていた。

「こんなモンでいいか？」

「ああ、有難さんよ、モエギちゃん」

「ちゃんはやめてくれて……奥歯がこそばゆくなる」

やめてくれと言いながらも娘はさして嫌そうでもなかった。

「薄暗くなって来たし、夕食ゆづげの支度にかかろうかねえ。」

今日は豆料理ですよ」

「やだっ、婆さんの豆料理は美味いもんな」

「秘伝を教えただげるよ」

「うん、水汲んで来る」

両手と頭に水桶を乗せて水場へ駆けて行く蒼い髪の娘を、老夫婦は穏やかに見送った。

かねてから、いきなり現れては力仕事や家の修繕等をやって

くれていた何処の誰とも分らない娘が、かしこまってやって来たのは数日前。

「私を置いてくれないか？　ずーっとじゃなくていいから」

常々世話になっているとはいえ、正体も分らない娘を何で住まわせる気になったのか？　若くに亡くした一人息子と同じ色の目にほだされたからかもしれない。

「ずーっといてくれてもいいんだけどねえ。孫なんて諦めていただけで……」

「婆さん！　変な魚がいたから捕って来た。これ、食えるのか？」

朱色の尾ヒシが飛び出した桶を掲げて坂を駆け上がってくる娘に、老夫婦は飛び上がった両手をブンブン振った。

「ダメダメ！　それは総領殿が生け簀で飼ってる緋鯉だよ。早く戻してー！」

「げげー！」

丘の端の林から、賑やかで温かな三人の様子を、そっと見守る漆黒の青年がいた。仲間の若衆が後ろから声を掛ける。

「若、まどろっこしい事やってないで、既成事実の一つも作って総領に押し切っちゃえばいいのに」

「そんなんじゃないんだよ。アイツは今、手探りで探している最中なんだ」

「何を？」

「見失っていた自分自身を……だよ」

西風の娘は、自分の、本当に大切なヒトを幸せにする事から始めたのだ。身分も素性も捨てて、素の自分になって。

そうして、自分自身をも幸せにして、初めて里の皆の為に居させる身になれるのだ。

浅葱の君がそっだったように……………。

くおしまい

